だから、もうやめてくれ(仮題)

並中半平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
だから、もうやめてくれ（仮題）

【Ｎコード】
Ｎ３９９９Ｚ

【作者名】
並中半平

【あらすじ】
トラックに轢かれそうな少女を見殺しにした青年は、きがついたら魔物が跋扈するファンタジーな異世界にトリップしてて・・・・・

そりゃねえよ（前書き）

読もうと思って下さってありがとうございます

そりゃねえよ

僕の前で見知らぬ少女が死んだ。トラックに轢かれ、弾かれて。バラバラになって。
見るも無残な姿を曝してコンクリートの上に横たわっている。
何事かと人々が遠巻きに事故現場を囲み、写真を取り出す。
野次馬根性大爆発。
僕はそんな彼らから離れるため、背を向けて立ち去った。
いや、正確には立ち去ろうとした。出来なかったのだ。
僕の服の裾を掴む一人の少女によって。

「・・・・・・・・・・し・・・・・・・？」

無理やり絞り出したかのようなか細い声だった。

「・・・・・・うし・・・・・・？」

僕の反応が良くなかったからだろうか、少女はまた何かを発した。

「牛？どうでもいいけど、服、離してくれないか？伸びちまう」

「――――――――」

今度ははっきりと聞こえた。
どうして助けなかったのか、と。
トラックに轢かれそうだった少女を僕が気がついていて助けなかったと思っているのだろう。まさにその通りだ。
正確には助けようとさえ思わなかった。

「あなたに救われていれば彼女は救われていた」

「そりゃねぇよ。トラックからは助かっても、あの少女の人生は救われないものになっていただろうよ」

「あなたが代わりに死んだら負い目を感じるから？」

「それもあるかもな」

「たったそれだけが助けなかった理由？たったそれだけが彼女が死んだ理由？貴方は彼女のために彼女を見殺しにしたというわけ？」

「いや、そんな危険な思考は持ち合わせちゃいねーよ。生きたって救われないけど、死んだからって救われるとは限らねーんだからよ」

「じゃあ、――――？」

「他人の為に死ぬなんてご免だろ？」

目の前の少女は一瞬、驚いたように目を見開いた。
そんなに奇想天外奇天烈爽快なことを言っただろうか。至極、最もなことを言ったつもりなのだけれど。
大体そうだろう。家族や親友、恋人に恩師だとしても自分が代わりに、なんて思うことはない。
見知らぬ誰かを助けるなんて仏陀か転生系の小説の主人公くらいしか思いつかない。
だから、僕は少女を見殺しにした。
酷い人間だと思わないでくれ。これが人間だ。人間なんて自分が助かればいいのだ。

「可哀想な人」

「何とでも言え。ところで訊きたいことがあるんだが、構わないか」

「なんでもどうぞ」

「なら遠慮なく。どうしてお前は轢かれてバラバラになったはずの少女と同じ顔をしているんだ？」

「彼女は私で、私は彼女だから」

「クローンかなにかか？」

「違う。けれど、違くもない」

まるで意味がわからない。それに、死んだはずの少女がここにいることに誰も何も思わないのだろうか。

気になってそちらに目を向けると野次馬に溢れかえっていた筈の道路は人っ子一人いなくなっていた。

事故を起こしたトラックも轢かれた少女さえ。何ひとつとして。

「訊きたいきとはそれだけ？」

「ちょっと・・・・・・・」

待て。

言い切る前に少女は僕の服から手を離し、光の粒子となって消えて行った。

途端。

街は喧騒を取り戻した。遠くからパトカーと救急車のサイレンが聞

こえてくる。
何だったんだ。あれは。まるで夢だったかのようだ。
「まあいいか。今日は早く帰って寝よう」
明日も学校だし。
服の裾にできた皺だけがどこか現実味をおびていないように思えた。

そりゃねえよ（後書き）

導入の導入部分としてかなり短めに仕上げみました。
誤字脱字、意見感想がありましたら是非ともお教え下さいまし。

助かった（前書き）

読もうと思って下さってありがとうございます。

助かった

僕が少女を見殺しにした翌日。こう書くと僕の人格が疑われそうだから、僕が交通事故を目撃した翌日。
日差しの眩しさに目を開くと、真上にある太陽から真っ直ぐに照らされていた。
僕の部屋にも天井があったと思ったが・・・・・
というか、いくらボロボロで家賃２．８万のアパートだとしても天井がなくなるなんてことはない。少なくとも文明の発達した２１世紀の日本では。
ついでに言うと壁も、ベッドもない。まあ、ベッドは元からないけれど。
壁がないということはつまり、今どこにいるかが分かるということだ。
普通なら。
寝ぼけて近所の公園か何処かのベンチで寝てしまったのかと思ったが、どうも違うみたいだ。
我が家の周囲には人工林のある公園がちらほらとある程度だが、そこの人工林はこんなに青々と茂っていない。
まるで何処かの樹海に迷い込んでしまったかのようだ。

「さてどうしたものか」

顎を撫でる。僕の癖だ。考えごとをするときはいつも無精髭を撫でるのだ。
が、

「ん？」

髭がない。切り揃えることはあっても剃ることなどない髭が綺麗さっぱりなくなっていた。

「どういうことだよ、おい」

当然のように僕に応えてくれるものはない。足元を蟻の行列が横切って行くだけだ。

本当に静かな森だ。

都会の喧騒が全く聞こえて来ない。昨日、不可思議な少女と言葉を交わしていた時に似ている。

随分と人里から離れてしまったのか。例の少女が近くにいるからなのか。

と、

パーン

僕の思考を遮るように乾いた破裂音が聞こえてきた。

「逃げたぞ」「そっちだ、そっちにいった」「捕まえろ」「追いかけろ」

続いて男たちの怒声が聞こえてきた。

助かった。

柄にもなくそんなことを思った。人は助かりも救われもしないと思っていたのに。

ともかく、僕は声のした方へ駆け出した。

暫くもしないで目の前の草むらがガサガサと揺れた。

ああ、これで助かったと思った。思ってしまった。

が、草むらから出てきたのは人ではなくイノシシのような生き物だった。しかもやたら大きい。

僕は日本人男性の身長の平均よりはあったと思うがそれよりも少し大きく感じる。

それが猪突猛進といったように僕に向かって走って来ていた。

ヤバイ。

思うより早くイノシシは僕の目の前まで迫っていた。
ぶつかる。死んだな、これは。
刹那。
僕とイノシシは正面衝突した。さながら昨日の少女とトラックと同じように、力も持たない弱者と圧倒的な暴力とがぶつかったのである。
勿論、弱者たりえたのは僕の方だったはずなのだけど。
何故かイノシシは硬い壁にぶつかったかのように顔はひしゃげており、牙も半ばからポッキリと折れていた。
「はぁ？」
何だこれは。何が起こったんだ。
思わず体を庇おうと前に出した腕を見た。
黒かった。普通の黄色人種に比べてという訳ではなく、褐色系の黒さだった。
それにちょっと、どころかかなり小さい。子供のそれのように。
「どうなってんだよ、これは」
茫然自失で立ちすくむ僕と、猟師然とした男たちがひしゃげたイノシシを挟んで会合を果たした。

助かった（後書き）

誤字脱字、意見感想がありましたらご自由にどうぞ。

ただ呪ってやる（前書き）

読もうと思って下さってありがとうございます。

ただ呪ってやる

魔族だ。

彼らは口々に僕を指差し言った。日本語とは明らかに言語体系が異なっていたが、どうにか理解できた。ついでに言っておくと英語でも、中国語でもフランス語でもなさそうだった。他の言語は詳しくないけれど地球の言語ともどこか違った印象であった。

彼らは僕によい印象は持ってない、と。ただそれだけは分かった。

全員が弓だの刀だの槍だのを僕に向けて構えている。

殺せ。

集団の内、誰かが言った。槍を持った髭面の男だったかもしてないし、刀を持ったリーダー格の男かもしれない。弓を構えながら震えてる青年かもしれない。

とにかく、男たちは僕に対して明確な殺意を露わにした。

殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。
殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。
殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。
殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。
殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。
殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。
殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。
殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。殺せ。

最早、恐怖しかなかった。殺されるかもしれない恐怖よりも、男たちの団結力が怖かった。恐ろしかった。

カルト集団の会合を覗いた時のような異様な一体感が怖かった。

どうしてそこまで敵意を、感情を表現できるのか分からなかった。
そして、少しだけ、ほんのちょっとだけ羨ましかった。
待ってくれだとか、話せば分かるだとか言えばこの場では明らかな死亡フラグだろう。男たちには会話の意思はない。断絶してしまってる。
だから、僕にできることは一つしかない。逃げることだ。
逃げ延びるしか僕には生きる術はない。
たとえ、某名探偵のように身体が縮んでしまっていたとしても、黄色から褐色に肌色が変わっていても、イノシシとに衝突で生き残ったとしても僕は僕だ。
少女を助ける勇気もなく、それを戯言で正当化して納得しようとするようなひねくれ捻じれた僕だけど、どうやら根本的には歪んでなかったようだ。
死ぬのが怖い。
ただそれだけの感情が僕を揺り動かした。
軽いステップで男たちに背を向けると脱兎も驚くような早さで駆け出した。
脱兎どころか僕も驚いたけど。
遅い。
凄まじく遅いのだ。
不意に走ったにも関わらず、十歩も走らない内に取り押さえられてしまう程度には遅かった。
あのイノシシだってそれなりに逃げていたはずなのに。

「まったく、手間をかけさせやがって」

僕を地面に押さえつけてる誰かが言った。まあ、男たちの誰一人として知り合いはいないのだから、誰もが誰かで他人でしかないのだけど。

「さて、悪く思わないでくれよ」

「俺たちの生活がかかってんだ」

「子供だとしても、魔族の首はいい金になんだよ」

「まあ、恨むなら魔族に生まれた自分を恨みな」

口々に言う男たちはきっと僕と同じなんだろう。どんなに他人に悪いことをしても、言っても自分さえ良ければいいような自分勝手で得手勝手な人間。
他人のために、みたいな偽善ぶったやからじゃない分だけまだいいのか。

「いいぜ。僕は君たちの為に死んでやる。恨んだり、憎んだりもしない。ただ呪ってやる。お前たちはいつまでも自分勝手に生きて、一生涯救われない人生を生きるんだぜ」

まるで自分に言い聞かせるような言葉を吐き出したと同時に、首に向かって振り下ろされる刀を見て僕は意識を手放した。

＊

とは言え、自分の精神が別のものに移ってしまうなんて荒唐無稽な出来事が現実世界で起きる訳もなく、僕は自室のベットで目を覚ました。
いやにリアルな夢だとは思ったが。

「果たしてどちらが夢なのか」

聞き覚えのある声に眉を潜めた。

「何処から入って来た？」

「こちらこそがあなたの夢なら誰が何時何処でどうやって登場したとしても問題はないはず」

「何を言ってるんだ、お前は」

「じゃあ、説明して。昨日、あの事故の後でわたしとあなたが会話している最中、街のあらゆる喧騒が止んだ理由を」

そんなの説明できるはずがなかった。それこそ？夢でも見ていた？と言わなければ。

「ほら、説明できない。昨日の出来事が夢ならば説明が簡単なのに、あなたは常識《偏見》に捉われすぎてる」

「じゃあ、お前はこれが夢でさっき見ていたのが現実だとでも言うのか」

「そう」

「胡蝶の夢かよ。いっそのことどっちも夢で昨日の朝にでも目覚めればいいんだけどな」

「そしたら同じ夢の繰り返し。あなたは少女を見殺しにして、男たちに魔族として殺され、わたしと話して、昨日に目が覚める」

「そりゃ、怖いな。僕は何時になったら目を覚ますんだ」

「あなたが目を覚ました時」

狂ってやがる。いや、狂ってるのは僕の頭か。殺されそうになったからこんな荒唐無稽な夢を見てるのだろう。
いや、殺されそうになったのは夢の話だし、現実の僕がこんな幻覚を見る理由なんてないはずだし。
夢を見ているのは日本人たる僕か、魔族と言われた僕か、はたまた別の僕の夢がそれら二つの僕なのか。
とめどない思考の輪廻に捉われてしまったようだ。
頭が痛い。
目を覚ませって、どうすりゃいいんだよ。

「わたしは正直村の住人。この世界は夢ではない」

いや、訳わかんねーよ。

ただ呪ってやる（後書き）

誤字脱字、意見感想がありましたらご自由にどうぞ。

それなら問題あるまい（前書き）

読もうと思って下さってありがとうございます。

それなら問題あるまい

意味不明な言葉を残して例の少女はいなくなってしまった。まるで夢だったかのように。
少女が正直村の住人ならこっちが現実なのだけど、嘘つき村の住人なたこっちが夢になってしまう。
本当に訳がわからない。というか全部デタラメの可能性もあるけれど、それは多分考えなくても良さそうだ。
あの不自然さはどうしようもない。
明日も学校のはずなのに、取り留めもない考えが脳内を渦巻き、眠れない。
僕は薬箱から、常備してある睡眠薬を取り出して水と一緒に飲み込む。
次第に頭がぼーっとしてきて、布団に潜り込むと意識を失った。

＊

一瞬だけ。
目を覚ますと僕は森の中で這いつくばっていた。背中には重圧があるから、きっと誰かが押さえつけているのだろう。
辛うじて見える手は褐色だった。

「どうなってるんだ、これは」

戸惑うような声が頭の上から聞こえた。確認できる足は四対、僕の上の誰かを含めて最低で五人の内誰かが言ったのだろう。
そういえば昨日の夢でも五人くらいいたような気がする。妙な整合性だった。

「どうしてこいつを切ろうとするたびに邪魔が入るんだよ」

「・・・・・・聖霊の加護でもあるんじゃないのか？」

「言うなら、悪魔の呪いだろ？」

「どっちにしろ、まだ三回邪魔が入っただけじゃないか」

「三回も邪魔が入ったんだぞ？！二回までならまだ偶然だろうけど、三回もだぞ」

どうやら、昨日の夢と続いているのなた、殺されかけた僕は三度の何らかの偶然に助けられて生き永らえているらしい。
これが悪魔の所業なのか、聖霊の所業なのか測りあぐねているところなのだろう。
僕としてはもう諦めていたところだし、どうでもいいのだけど。

「でも、魔族だ。俺のじーちゃんも魔族に殺されたし、ハーロルトんとこの兄貴だって魔族に殺されたんだろ」

「それを言うならウルリヒの奴なんてかみさんを魔族に犯されたじゃないか」

「・・・・やっぱり殺すしかないか」

「で、誰がやる？」

「あーー、俺は刀が折れちまったし」

「俺の刀は刃こぼれが酷いしな・・・・・」

「俺は弓の弦が切れちまって使い物にならねーよ」

「俺もこいつおさえとかなきゃいけないし」

「だーーー！分かったよ、俺がやりゃいいんだろ？！でも、これで死ななかったらどうすんだ？」

「そしたら・・・・・・黒竜族の子供とでも言って村に連れて帰ればいいさ」

「まあ、特徴は似てるが・・・・・」

「というか、俺には黒竜族にしか見えなくなってきたんだが？」

「あ、俺も。というか、俺は魔族と黒竜族の違いが分からないんだが」

＊

結局、というオチをつけていいのか分からないのだが、僕は殺されることなく男たちの村に連れて行かれた。
彼らには判断が付かなかったから村長に丸投げしようという感覚らしい。
そして現在、僕は両手足を縛られた状態で村長らしき白髪で髭の蓄えた爺さんの前に座らされている。

「ふむ」

ただ座ってるだけなのに威圧がやばい。この爺さん、かなりできる。

とか、一般人たる僕に分かるわけもなく、アルバイトの面接の時程度に緊張していた。

「お主は魔族じゃな。じゃが、普通の魔族とは違った力の流れを感じる」

即決とか、パナいなこの爺さん。なんだよ、力の流れって。そんなのどこのファンタジーだよ。
まあ、魔族とか言ってる時点でファンタジーなのだろうけど。

「普通の魔族からは悍ましい悪意を感じるのじゃが、お主はそれとは無縁のようじゃな。かといって、善意の塊という訳でもなさそうじゃが」

心理テストだってそこまで正確に人格測定なんぞ出来っこないだろうよ。

「本来、魔族ならば恨みを持った者も多いし、即急に殺すとこなのじゃが・・・・・・」

「四度、何らかの偶然によって失敗しました」

「と、言うしのう。困ったものじゃ。それに、魔族と言えどわしの孫と同じくらいの童を殺すのものう」

「村長・・・・・・」

「だったら、角だけでも隠せば誤魔化せるんじゃないでしょうか？」

あ、今の僕には角があるんだ。

「そうじゃな。子供の黒竜族には角はないしの。黒竜族と偽ってこの村に住まわせるかのう。お主もそれでよいか」

僕の計り知れぬところで話が纏まりそうだったところ、村長が僕に話を振った。

当事者たる僕の意見も必要かもしれないけど、子供に意見をきく大人ってどうなんだろう。

「僕としては殺される覚悟はもうあったからどうでもいいけど、誰が僕の世話をするのさ。自分で言うのも何だけど、僕はまだ保護者が必要な年代だからね」

どうやら見た目は五歳くらいらしい。通りで逃げ切れない程度に足が遅いはずだ。

「それなら問題あるまい。ニクラスがその任を受けてくれるじゃろうて」

「何で俺がこんな奴の面倒を見なきゃいけないんだよ?!」

「何じゃ、ツェツィーリアにあのことをバラしてもいいのかのう?」

「ちょっと待て、じじい!!あのことはリアには言わないって約束だったろっ?!」

「はて、そんな約束したっけのう」

「この老いぼれじじい・・・・!分かったよ、俺がそいつを引きとりゃいいんだろ。その代わり、リアにあのことを漏らしたら、てめ

ーを殺す！！」

「うむ。決まりじゃ。ということで、ニクラスのとこで世話になるといい」

それなら問題あるまい（後書き）

誤字脱字、意見感想がありましたらご自由にどうぞ。

一つ忘れてた（前書き）

読もうと思って下さってありがとうございます。

一つ忘れてた

「で、あんたの名前はなんなんだ？」

魔法というものの存在はファンタジー要素だとしても魔族らしい僕がいる世界では受容してもいいのだろう。
村長の奥さんが昔は高名な魔法使いだったらしく、僕の角を見えなく、触れなくしてくれた。
他にも尻尾とか、羽とかがあるけどそれは黒竜族と変わらないからあっても問題ないらしい。
で、そんな処置が終わって僕はニクラスと呼ばれた男性と、その自宅へ向かって歩いていた。

「名前？」

「ああ。生まれてこの方、一人っきりでいた訳じゃないだろ。親に捨てられたにしろ、名前があったはずだ」

とは言え、この世界について僕が知ってることなど皆無で、つまりこの世界の僕について知ってることも皆無ということだ。
ニクラスだとか西洋的な名前の世界で日本人たる名前を言うのも妙な話だし。
だから。

「名前はまだ無い」

と僕は言う。ついでにどこで生まれたかとんと見当もつかぬ、とでも言えばいいのだろうけど生憎と僕は猫ではない。薄暗いところでニャーニャー鳴いていた記憶もない。

ある記憶と言えば日本で学生をしていた２０年間の記憶だけど、役に立つまい。

「まだないって・・・・ 今までどうやって生きてきたんだ？」

「どうにかして生きてきたんだろうよ」

「大人を舐めてんのか？」

「いや、僕はいたって真面目だぜ。それに僕を養ってくれるだろう相手の機嫌を損ねたって仕方ないだろう」

「じゃあ、その捻くれた物言いは素だって訳か」

「そういうことさ。つまり、僕と関わるに際して慣れなければならない点だということだ」

「面倒くせーガキだな、おい」

「その辺は気にしなくて構わないぜ。僕は飯と屋根さえあれば文句は言わないし、関わりたくないなら屋根裏にでも押し込めておけばいい」

「・・・・・・ いや、そんなことはしねーよ」

ニクラスは短く刈り上げた薄茶色の髪をガリガリ掻き毟りながら言った。

「血は繋がってなくとも今日からお前は俺の息子だ。だから、お前がどんなに捻くれてようと俺はお前を息子として扱う。お前が俺を

親父だと思わなくてもな」

「へえ。ニクラスっていい奴なんだな」

「声に感情が篭ってないぞ」

「意図的に声に感情を篭らせるよりはマシだろ？」

「うわぁ、可愛くねーガキだな」

「・・・・・さっきから面倒くせーとか可愛くねーとか、僕が普通の子供なら泣いてるぜ」

「ふつーのガキはンなこと言わねーっつの！」

「違いないね」

「さて、無駄話はこれまでだ。ここが俺ん家で、妻と子がいる。2人とって魔族は恐怖の対象に他ならない。分かってると思うが、一言も魔族という言葉を発するなよ」

村の外れにある、それでいてやや立派な門構えのある家の前でニクラスは言った。

「分かってる」

「聞き分けがいいな、お前は。本当に魔族か？」

「いや、黒竜族さ」

＊

ただいま、とニクラスは扉開いた。どうでもいいが、内開きだった。２０半ばくらいの女性と、その足元には今の僕と同じくらいの女の子が出迎えてくれた。彼女らが出迎えたのは僕らではなく、ニクラスだけなのだけど。

「お帰りなさい、あなた。あら、その子は？」

「あ、こいつは狩りの途中で迷子になっていたのを見つけた・・・・・・」

「黒竜族の子供の、ナハトと申します。この度はニクラスさんのご好意でこちらにお邪魔させて頂く次第となりまして、どうぞよろしくお願い致します」

懇切丁寧に口上を述べてから頭を下げる。間違ってはいけないのが、言葉をしていてから頭を下げるのだ。頭を下げてから言っては言葉が地面に向かってしまうかららしい。

それはともかく、僕の隣でぽかんと目と口を大きく開けて呆然としているニクラスがかなり面白い。

「あらあら、これは丁寧に。私はニクラスの妻のツェツィーリアよ。それでこの子は娘のカルラ。ほら、カルラ。挨拶なさい」

「・・・カルラです」

カルラと自称した少女はツェツィーリアの足に身体を隠しながらポツリと言った。

「ごめんなさいね、カルラはちょっと人見知りなところがあるの」
「ああ、いえ。構いませんよ」
「・・・・・リア。何時までも玄関で話してないで飯にするぞ」
「そうね。でも大丈夫かしら。ナハト君がどれだけ食べるか分からないけど、三人分しかご飯がないのだけど・・・」
「それならじじいにパンをたくさん貰って来たから問題ない」
「村長さんに？それなら良かったわ。それじゃあ、すぐに準備するから待ってて頂戴ね」

ツェツィーリアさんはカルラを連れ立って家の奥へ、恐らく台所へと消えてった。
残された僕とニクラスはひそひそとどんな設定で誤魔化すかを話合った。料理を持ってきたツェツィーリアさんに訝しげな表情で見られたが気にしない。
料理は濃いめの味付けだったが、それなりに美味しかった。ご飯を食べながら、ニクラスと決めた嘘を騙り、その日は終わった。
因みに寝床はベット付きの客間だった。

＊

睡眠薬が聞きすぎたのか、僕が布団から這い出たのはいつも起きていた時間より二時間も遅かった。
寝付けなかった時間から逆算すれば同じくらいしか寝てないのだけれど。
ご都合主義なのか夢の世界での僕はどうやら生き延びたようだ。

と、ここで一つ気になる点があった。

「夢にしてては嫌に意識がはっきりしてんだよな・・・」

まるで現実のように。怖くて、何が怖いのかさえ分からないが、その言葉を口にすることは出来なかった。
明晰夢というのは往々にして起こるものだし、そこまで気にかける点でもないのだが、引っかかる。
例の少女の言葉のせいというのもあるのかもしれないが。

「さて、学校に行くか」

一限には間に合いそうにないが、二限から出ればいいか。ジャケットを羽織ってカバンを肩にかけ、僕は部屋を出た。
が、直ぐに足を止めた。例の少女が目の前に立っていたからだ。

「また、あんたか。もう好い加減にしてくれないか？」

自分でもわかる程度にうんざりとした声だった。

「一つ忘れてた。わたしが嘘つき村の住人か、正直村の住人か、あなたに一つだけの質問を許す」

淡々と少女は語る。
僕は何も答えず、応じず少女の脇をすり抜けて階段を駆け下りた。
自転車の鍵を外して前カゴにカバンを乱暴に入れて全力で漕ぎ出す。
僕を駆り立てるのはたった一つの恐怖だった。

一つ忘れてた（後書き）

誤字脱字、意見感想がありましたらご自由にどうぞ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3999z/

だから、もうやめてくれ(仮題)

2011年12月18日00時51分発行